

# 被虐待児の閉ざされた心を開く音楽遊び

松原 由美<sup>1</sup>

Music Play to Open the Closed Heart of the Ill-treated Child

Yumi MATSUBARA

## 要 旨

本研究は、「音楽遊び」が被虐待児の傷ついた社会性の改善・向上にどのような効果を有するかを検証することを目的とする。

虐待された子どもにはさまざまな問題行動や臨床症状が見られ、なかでも社会性の欠如や未発達、被虐待経験による後遺症を克服して健全な発達を遂げるのを阻害する重要な要因である。それは社会性が未発達だと子ども期の生活に支障を来しやすいだけでなく、社会に出てからも適切な人間関係を結ぶことが困難になると考えられるからである。音楽遊びが問題の克服に効果を持つのではないかと仮説に立って、児童養護施設に措置されている被虐待児を対象に、約8カ月にわたり、計20回（1回45～50分程度）の音楽遊びを集団で実施し、沢宮（1998）の「幼児用社会性尺度」を使用して評価することで、社会性スキルがどのように変化したかをとらえることとした。あわせて、担当保育士による観察およびVTR記録によって、音楽遊びのどのような局面で、対象児の態度や表情に変化が現れたかとらえることにした。その結果、音楽遊びは被虐待児の傷ついた社会性を改善し、閉ざされた心を開くのに一定の効果があることが明らかになった。

## Abstract

This study aims to examine the effect of improving sociability in abused children, through the implementation of “music play.” The children were inclined toward a lack of sociability, [Remark 1] which is a characteristic of abused children, and due to this they experienced difficulties in living in their nursing facility as well as in the kindergarten. To address this, “music play” was conducted in groups in the children’s nursing facility twice a month, totalling 20 times (approximately 45–50 minutes for one session) over a period of eight months. The level of skill of child A was examined through a skill-level survey in which the levels of co-operation, self-restraint, and self-expression were assessed through an interview conducted by a childcare worker after the implementation of each music play session. Additionally, the method of evaluation used by the childcare worker in charge involved providing scores by utilizing a sociability scale questionnaire. This study demonstrated that “music play” developed sociability in abused children.

キーワード：被虐待児 音楽遊び 社会性 音楽療法

key word : abused children, music play, sociability, music therapy

## I. 研究の背景と目的

子どもは家庭や地域の中で守られ、愛情に包まれ慈しまれてこそ、健全な成長や発達を遂げることが出来る。しかし、核家族化に加えて地域における人間関係の希薄化が深まる中で、子育ての孤立化が進行し、育児不安や育児ストレスが亢進した結果、保護者による子ども虐待という深刻な状況が現れている。今や虐待は重大な社会問題として認識され、2000年にはわが国でも児童虐待防止法が制定されるに至った。同法はその後、短期間に数次にわたる改正を受けて対策が強化されている。しかし、それと逆行するかのよう、わが国における子ども虐待の件数はむしろ年々増大しつつあり、2013年に児童相談所に通告された児童虐待件数は73,765件にも昇るに至っている。

子ども時代に虐待を受けた経験は、子ども期においてだけでなくその後の全人生にわたって影響を与えるといわれている(友田 2012)。また、虐待に起因するストレスによって、脳領域の器質および機能の発達が阻害されると指摘する見解もある(田村 2007)。さらに、多動性行動障害(ADHD)や自閉症スペクトラムなどの高機能広汎性発達障害や反応性愛着障害(アタッチメント障害)、解離性障害、PTSDなどについても、虐待の影響が疑われている。こうした被虐待経験によって引き起こされた障害を、第1の古典的発達障害、第2の自閉症的発達障害、第3の軽度発達障害に次ぐ第4の発達障害ととらえた見方もある(杉山 2013a,b)。被虐待児の怒りや無力感、無気力、絶望、不安が他者に向けられた時は犯罪や反社会的行為に走り、自分に向かった時は、薬物中毒やアルコール中毒あるいは自殺未遂を繰り返すと指摘する見解もある(友田 2012)。特に非行と被虐待経験との関連を指摘する見解は少なくない(大迫 1999, 藤岡 2001a,b)。以上のほか、被虐待児には落ち着きのなさや社会性の欠如がみられるという報告もある(坪井・李 2007, 高橋 2010)。

このように、虐待された子どもにはさまざまな問題行動や臨床症状が見られるが、なかでも社会性の欠如や未発達は、被虐待経験による後遺症を克服して健全な発達を遂げることを阻害する重要な要因として、特に注目を要する。なぜなら、社会性の発達が未熟であると、人間関係の構築が困難になりやすいことから、幼稚園や学校での生活に支障を来しやすいだけでなく、社会に

出てからも適切な人間関係を結ぶことが困難になると考えられるからである。社会性の発達が極端に遅れている場合には、犯罪に手を染めたり自殺に至ったりする傾向が被虐待経験のない子どもに比べて高いことも指摘されている(沢宮 1998)。

虐待された子どもへの対応として、厚生労働省通達により、児童養護施設では1999年から遊戯療法やカンセリングなどの心理療法を実施して、児童の安心感や安全感の形成と人間関係の修復を図ることを目的に、心理療法担当職員が配置されることになり、2006年からは常勤化されている。これにより心理的ケアが実施されることになったが、心理職の職務内容についてはガイドラインがまだ示されておらず、施設任せであることから、必ずしも十分な効果を上げるに至っていないという指摘もある(木村 2009)。

被虐待児に対する心理的治療法にはさまざまなものがあるが、その一つとして「音楽療法」の活用が考えられる。しかし、日本では、音楽療法の歴史が浅く、音楽療法士の資格要件やセッションの内容なども明確には定められていないのが現状である。それでも、音楽療法はすでに乳児から高齢者まで幅広い年齢層を対象に施され、リハビリテーションや療育など様々な分野で一定の効果のあることが報告され、認知度も高まっている。しかし、児童養護施設で被虐待児に音楽療法が実施されるケースは少なく、まして長期間にわたるセッションが被虐待児の社会性の改善・向上にどのような効果を有するかについてはまだほとんどわかっていない。このような状況を踏まえて、音楽遊びが虐待によって傷ついた子どもの社会性の回復と発達にどのような効果を有するかを明らかにすることが、本研究の目的である。

## II. 研究の方法

### (1) 研究の課題

本研究では、「音楽療法」そのものではなく、それに準ずる「音楽遊び」を実施することにした。「遊び」と「音楽」を融合させることにより、それぞれの効果が相乗的に高められると考えたからである。

遊びは、社会的行動の発達に影響することがパーテンにとって明らかにされている(パーテン 1982)。また、遊びは一般に「充足感やストレスの解消、安らぎや高揚などといった様々な利益をもたらす」ことが知られている(ウィニコット 1988)。もともと、人の心を解きほぐす力を

もった音楽には、虐待によって硬く凝り固まってしまった心の苦しみに直接アプローチし、傷ついた心を癒す効果があると考えられている。それを遊びとして実施することで、子どもたちの情緒に訴えかけ、それを揺さぶることで、閉ざされた心を開放することが出来るのではないか。しかも、音楽遊びは、他者とかかわりながら行われるものであることから、音楽によって開かれた心がやがて他者に向けられていき、それが傷ついた社会性を回復・発達させる効果をもたらすことが期待される。

このような仮説にもとづいて、本研究では児童養護施設に措置されている児童を対象として音楽遊びを行い、社会性を示す指標がセッションを通してどのように変化するかを手掛かりにして、その効果を検証することとした。

## (2) 調査の概要

音楽遊びは45～50分を1セッションとし、2週間に1回程度の頻度で計20回実施した。実施期間は、201x年10月から約8カ月にわたった。

音楽遊びのセッションは、X児童養護施設で生活するA児(男児)を主たる対象とし、他に同じく被虐待児である男児3名、女児1名を含め計5名を対象とした。対象児の選定にあたっては、施設における児童台帳などを閲覧するとともに、施設での実際の生活状況を観察し、家庭支援専門相談員や施設長とも相談して決定した。A児は、①精神年齢が非常に低い、②音楽に接した経験がほとんどない、③集中することが苦手で飽きやすい、④何事においても自分が楽しくないとまったく興味を示さず、すぐにふてくされてしまう、⑤一度機嫌を損ねるといつまでも拗ねる、⑥人が嫌がることをなかなかやめられない、などの特性を持っていることが確認された。このように、A児は入所児童のなかで社会性の発達に重篤な遅れが見られることから、主たる対象児とすることにした。なお、A児を含め対象児はすべて児童養護施設で生活しながら、幼稚園に通っている。

A児の父親は、A児が生まれたとき17歳の高校生で、A児誕生直後に高校を卒業したが、その後、その両親などの家族と共に失踪し、現在も所在不明である。その父親の家庭も機能不全であったのではないかと、在学していた高校の担任は推測しているが、確かなことはわかっていない。

A児の母親は、機能不全の家庭で育ったことが記録からはっきりわかっている。A児を産んだときは33歳であったが、それまでにいずれも父親の異なる5人の子ども

を産んでいる。A児出産後、精神疾患に罹患したこともあってA児を養育することができなかった。それだけでなく、まだ乳飲み子であったA児を含め、子どもたちを家に置き去りにして遊びに出かけたりするなど、子育てをほとんどしないネグレクト状況にあった。A児を含む6人の子どもはすべて、児童養護施設または乳児院に措置されている。母親はA児が1歳の誕生日を迎えた直後に病死した。A児のきょうだいにはいずれも後見人がいない。

通常、ネグレクトされた子どもは体が小さいことが多いといわれるが、A児はむしろ標準よりやや大きい体格をしている。愛着関係を持てず、人間関係を結ぶ能力に障害が起きる反応性愛着障害の症状を示している。その結果、社会性スキルが身についておらず、コミュニケーション能力も非常に低いことから、相手の気持ちを理解したり自分の気持ちを伝えたりすることが不得手である。さらに言語能力が低く、滑舌や発語も不明瞭である。また、多動傾向、イライラによる指しゃぶりや夜尿、いつまでも拗ねるなどの行動がみられ、また施設や幼稚園では、仲間にすぐちょっかいを出し、注意されると大暴れするといった状況にある。このようなことから重複愛着障害ではないかと疑われるが、台帳には記されていない。また、養護施設の担当保育士や通園先の幼稚園は、A児の養育には、ほかの被虐待児に比べ非常に苦慮しているとのことであった。

いっしょにセッションを受けた他の4名の児童もすべて被虐待児で、深刻な愛着障害をもっており、社会性の欠如、多動性行動障害、自閉症スペクトラム、解離性障害などの症状を示しているが、A児に比べれば症状は比較的軽度で、全体に穏やかな性格をしている。

## (3) セッションの内容とねらい

音楽遊びの内容は、各セッションとも、次のような流れの構成とした。①はじまりの歌、②こんにちはタンバリン、③音楽パネルシアター(図1参照)、④歌遊び、⑤音楽ゲーム(図4参照)、⑥リトミック、または、楽器遊び、⑦ツリーチャイムでバイバイ——である。



図1 音楽パネルシアター

セッションの指導案作成にあたっては、事前のアセスメントにもとづいて、できるだけ子どもの好きな曲を選曲すること、飽きずに楽しく思いを表出できる遊びとすること、

と、友だちを認識してコミュニケーションを十分に取れる遊びとすることを考慮して、毎回指導案を作成した。一例として、第2回の指導案を表1に示す。

表1 セッションの指導案の一例

×月28日(日) 10:00~10:40 セッション2回目			
<b>【本日の目標】</b> ①音楽の楽しさを味わう ②友達と仲良く音楽で遊ぶ ③音楽を介した身体表現を行い、ストレスなどの発散を行う			
時間	内容	MTの動きや留意点など	使用楽器など
10:00	挨拶 タンバリンでご挨拶	始まりを意識させる 四分音符(♩)を中心に挨拶する 「こんにちは、〇〇さん」	タンバリン
10:08	ミュージックパネル シアター	「こんにちは 由美先生」 「おべんとうのうた」をパネルで見ながら歌を覚える 興味を持っているようであったら、2回実施する 好きなおかずを不織布に描いてみる 時間内に仕上がらない児童は、次回まで仕上げるように話す	パネルシアター用台 パネル用布 くれよん 机
10:20	おべんとうの歌を覚える 音楽に合わせて体を動かす	ゆっくり、フレーズごとに音を確認しながら歌えるようにする 伴奏は主旋律のみ 音を聴き反応することを覚える⇒音楽が止まったら止まる ⇒ 音楽が聞こえたら動く 子どもが変化を確認しやすいテンポ設定、(テンポを聴いて反応しやすいように留意する) 反応を確認しながらピアノを弾くようにする。 音楽を聴いて動けるようになったら、走りながらオーガンジー(薄布)を振りながら動く 「ちょうちょになりましょう!!」・・軽やかな音楽 子どもの反応を確認する	うす布(オーガンジー)
10:38	リラクゼーション ツリーチャイムで 次回の内容を話す 深呼吸 バイバイ	夕焼け小焼けのピアノと歌を聴きながらツリーチャイムを鳴らす やさしい音を意識させる 次回への期待を持てるよう、次回の内容を話す クールダウンを行う	ツリーチャイム

音楽遊びの効果については、直接の視認によるほか、VTRと写真の記録データをもとに、評価することとした。

A児の社会性スキル度の測定は、沢宮の「幼児用社会性尺度」(1998)を用いて、毎回のセッション終了後に、保育士がA児と対話しながら質問し、A児自身による自己評価と保育士による客観的評価を記録するというやり方で行った。社会性スキルを、協調性、自己抑制、自己表現という3つの観点からとらえて質問内容が設計されている。そして、「友だちとなかよく遊ぶ」や「友だちのおもちゃを横取りする」など、肯定的行動と否定的行動を含めて、全部で34項目の質問が設定されており、その質問に対する回答の得点合計によって社会性スキル度を判定するものとなっている。子どもの社会性を測定する尺度は他にもあるが、沢宮の尺度を用いたのは、質問者が質問しやすく、かつ子どもが答えやすい質問内容となっているからである。それでも、言語能力の発達に遅れが見られるA児にとっては理解の困難な質問もあり、実際に質問を行う保育士と相談の上、質問の表現に一部手直しをするなどの変更を加えた。

また、内容によっては一つの質問項目を複数に分けたりした。その結果、実際に用いた質問は全部で50項目となった。評価の結果は、質問項目ごとに、「できる」などの肯定的評価を2点、「できない」などの否定的評価を0点として点数化した。肯定的評価を2点としたのは、社会性スキル度の変化はごくわずかで、微妙なものと予想されたことから、その変化をとらえやすくするためである。

セッションで実施した音楽遊びは複数の内容からなるが、社会性スキルの向上にどのような内容の音楽遊びが効果をもったかを明らかにするため、A児の態度や表情の変化を観察し記録することとした。そして、保育士による観察記録とVTRの記録をもとに、A児の態度や表情に変化が現れたのはどのような内容の音楽遊びの局面においてであったかを判定した。

セッションを実施するにあたっては、次の3つの目標を設定した。①安定した心の状態を確保すること、②音楽活動を通して自信や達成感を持つこと、③仲間と交流しながらコミュニケーション能力を身につけること—の3点である。本来は、長期目標と短期目標を設定すべきところであるが、20回という期間限定のセッションであるため短期目標として設定した。なお、セラピストとして筆者は、常にA児の受容と共感を心がけながら実施することに留意した。

セッションで使用した楽器は、カスタネット、ウッドブロック、トライアングル、タンバリン、鈴、太鼓、マラカス、ギロ、カリンバ、シロフォン、オートハープなどである(その一部を図2に示す)。カリンバは、アフリカの民族楽器で、箱や板の上に取り付けられた長さの異なる細い棒板を親指の爪ではじいて音を出すもので、「親指ピアノ」ともいわれ、ヴィブラートがかかった不思議な音色を持っている。これは、刺激的な音を嫌う子どもにとって効果的であったという谷村(2012)の報告を参考に使用することとした。実際に使用してみて、木から生まれる優しい音が子どもたちは大変気に入った様子であった。それは、長く響く独特の音色や、操作が容易な割には指先のはじき方次第で音色が面白く変化することなどに、子どもたちが試したいと興味を抱いたようである。



図2 使用した楽器や玩具の1部

### III. 結果

セッションの結果については、A児の社会性スキル得点の変化および音楽遊びに対する態度の変化の2点に絞って述べることとする。

図4に見られるとおり、全般にA児の自己評価は高く、保育士による評価は低いというように両者の評価は乖離し、しかもその開きが大きいことがわかる。しかし、セッションの回数を重ねるごとに、A児の自己評価は徐々に低下し、その半面で保育士による評価はわずかながら上昇して、両者の乖離は次第に縮まっている。これは、A児の自己評価がより現実在即したものとなっていることを示すものといえるだろう。A児の自己評価の低下は11回目から現れているが、その前後の10回目と13回目には、急に顔つきを陰しくしたり、楽器を投げつけたり、ヒステリックに暴言をはいたりなどの行動が見られた。一時的ながらこのような問題行動が噴出したのは、ちょうど自己評価が低下し始めた時期と符合しており、両者の間に関係があることが推測される。しかし、こうしたトラブルはあったものの、全体として、セッションを重ねるごとにA児の態

度は落ち着いてきた。友だちとのトラブルも減少し、仲間に優しく言葉かけをしたりするなどの変化が、児童養護施設や幼稚園で見られるようになったことを保育士は確認している。

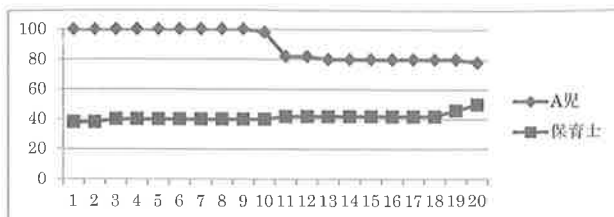


図3：A児の自己評価と保育士による評価の推移

注：縦軸は社会性尺度調査の点数、横軸はセッション回数を表す。

音楽遊びは、2～3歳程度の発達段階で可能な内容から始めたが、A児にはできない内容も多く見られた。

「歌遊び」と「手遊び」では、A児は積極的に取り組まなかったが、それは歌えないからであることが後に分かった。A児には歌詞のストーリーが頭に浮かばないため興味を持てなかったのだろうと推測される。

「リズム・楽器遊び」では、即興音楽がA児に効果があることがわかった。セッション当初、リズム・楽器遊びでは、好き勝手に走り回ったりするだけであり、「休符」も無視することが少なくなかった。

「音楽ゲーム」(図4参照)では、当初は楽器を独占したり、ゲームに負けたり思うようにできないと泣きわめいたりするなどの行動が見られたが、回を重ねるにつれて次第に態度を和らげ、仲間といっしょにゲームを楽しむなどの社会的行動が見られるようになった。



図4 音楽ゲーム(スティック遊び)の様子

#### IV. 考察

##### (1) A児の社会性スキルの改善・向上と心の変化

###### ① 安定した心の状態の確保

本研究では、「音楽遊び」は社会性スキル向上に一定の効果があることが明らかになった。同時に、社会性スキルの欠如には被虐待児の二面性が関わっていることが示唆された。二面性とは、一見人なつく、社会的に

見える表層と、誰にも言えないまま抑圧している真の自己(森田 1988)という深層である。親に甘えたいという気持ちも満たされないまま、集団生活を行うには心も体も育っていない時期に、施設での集団生活を余儀なくされたA児は、自分の本心を抑圧し偽ることによって生きるすべを身に着けていったものと考えられる。それが、人なつこさとして現れたものであり、物怖じすることなく、初対面の人に自己をアピールするという行動である。しかし、幼いA児にはいつまでもそれに耐えられる力があるはずもなく、抑圧されていた本心がともすれば表層に漏れ出てくるのは、むしろ自然なことといえよう。

10回目と13回目のセッションで表情や態度が急変したのは、その真の自己が表出したからにはほかならないと推測される。急に表情が鋭く変わり、楽器を投げたりヒステリックに暴言を吐いたりしたあげく、その回のセッション終了まで大声で泣き通したA児の態度の急変は、凄絶な程であった。筆者は、A児を抱きしめ安心するよう声をかけ続けたが、なかなか収まることはなかった。しかし、14回目以降は全くそのような様子は見られなかった。自分の存在を認めてほしくて甘えたいという願望からラポール形成を求める姿との二面性を持ち合わせているのである。しかし、認めてほしいという願望が強いにもかかわらず、真の自己の表出で周囲の人たちから拒否されるため、裏切られたという思いや不信感を募らせるといった悪循環が繰り返される。本来であれば、最も信頼して、依存し、心やすらぐ寄り添うべきであるはずの両親から虐待をうけたことは、人を信じることが出来ない人格を作るのに余りある。被虐待児は、人格形成の土台たる「基本的信頼の感覚」(エリクソン 1973)を獲得できず恐怖と不安の状況におかれている。そのため拠り所への希求を一層膨らませ、それが得られないことによる反動として問題行動を噴出させるのである(森田 1988)。こうした二面性は、他者には理解されにくいことである。そのため幼いA児は、「すねる、泣く、ちょっかいを出す」ことで自己存在を周囲にアピールしようとしていたのであろう。

しかし、セッションを重ねるうちに夜尿と指しゃぶりが次第に減少していったことが確認され、施設内でも相手に優しい言葉かけが普段の生活で見かけられるようになったことが保育士から報告された。こうしたことから、音楽遊びが精神の安定化に有効に作用し、A児が安定した心の状態を確保することにつながったと推測される。

###### ② 音楽遊びを通しての自信や達成感の確保

セッションを始めた当初は、実施者である筆者にまわりついたりするなど、独占しようとする行動が顕著に見られた。そして、その回のセッションの内容が気に入らないと、終了まで拗ねて大泣きしたりしていた。しかし、7回目ごろからはきちんと着席できるようになり、少しずつ気分を変えるよう努めている姿を確認できた。さらに、「おれ、負けても次に頑張るさげ、由美先生応援してほしいっちゃん(応援してほしい)」という言葉が出始めた。幼児室からプレールームへの移動でも、A児は当初、保育士に促されて一番遅く、嫌々来室してくる状況であったが、12回目からは自分の方から皆に声をかけ年少者と手をつないで来室するようになり、手遊び歌などを最後まで歌うよう努力する姿が増えてきた。また、遊びの最中でも楽器の配布や回収を自ら行い、さらに楽器の回収の際も取り上げるような行動から優しく受け取る行動へと変化していったことは、音楽活動が自信や達成感を持つことに役立ったことの表れと考えられる。

### ③仲間との交流を通してのコミュニケーション能力の向上

セッション当初、生活面においてA児は、問題行動が多かった。それは社会性スキルが未熟なため、人の気持ちを読めないことによるトラブルが主な原因であったと考えられる。しかしセッションを重ねるにつれて、徐々にではあるが、友だちとのトラブルが減少していったことが施設でも幼稚園でも確認されている。また、生活全般に渡る苦手意識がセッションの回を重ねるごとに次第に克服され、自信を持てるようになっていった。それまで新しい遊びなどに加わろうとしなかったが、次第に積極的にチャレンジするようになり、「日々の生活でも前向きな発言が出はじめた」と保育士から報告があり、映像記録からも確認できた。

通園している幼稚園からは、当初は、同級生が音楽活動をしている最中は別行動をしたり、他の園児にちょっかいを出したりしていたA児が、徐々に「いろいろなことをやってみよう」という意識を芽生えさせてきたという報告があった。また、人間関係の形成にも大きな変化が見られ始め、幼稚園のクラスに溶け込み始めたという報告を担任から得た。状況を十分に把握しながら、柔軟なセッションにするよう心掛けたことにより、A児も自然に参加へと誘われていったようだ。虐待された子どもたちはあらかじめ、設定された遊びができないことが少なくないが、それは被虐待児特有の後遺症に起因するだけでなく、

それまでの生活の中で、その遊びを十分経験していないことによるところも大きいのではないかと考えられる。親に育てられず児童養護施設に入所した子どもたちは、そこで生きるための環境は与えられても、発達段階にふさわしい遊びの機会を与えられるほどには条件が整っていない可能性も示唆された。セッションを重ねるにつれて、A児は仲間を意識して遊ぶようになり、後半からは、相手が工夫した遊びに参加したり、さらに自分で工夫した遊びをしたりするようになった。最終回の20回目では、仲間と相談しながら「遊び」を展開する姿も認められた。その相談では各自が自分の意見を押し通そうとしたので、筆者がそれぞれの意見の交通整理を始めようすると、A児が、自分の意見の良い点を他の仲間にアピールしようとし始めた。それまでのA児であれば、駄々をこねて大泣きする場面であったが、相手へ自分の思いを伝えるという行動へと変化し、自分で考案した遊びを「これでいい?」というように仲間の了解を得ることを覚え始めていたことなども、コミュニケーション能力を身に着付けていったことの表れと言えよう。

### (2) 社会性スキルの向上に対する音楽遊びの効果

「歌遊び」では、A児は曲の最後まで歌い通すことが出来なかった。歌詞の内容について質問したところ、歌詞が示す内容や情景を想像出来ないことが分かった。A児にとっては、歌詞がストーリーとして像を結ばず、たんなる言葉の羅列としてしか受け止められなかったため、興味をもてなかったようだ。そこで、歌詞をすべて紙芝居やパネルシアター、ペープサートにしてストーリーや情景を想像しやすいように工夫し、フレーズごとに単音をゆっくり歌うというやり方をとった。すると、A児は、歌のストーリーがわかったことで、歌えるようになった。そこで、幼稚園から、園で使用する歌を提示してもらい、それを施設で同じように練習したところ、幼稚園でも行動に変化が現れたとのことである。このような経験から、A児は、音楽活動が苦手であるために、幼稚園でも活動中はいつもほかの園児と別行動をとったり、ちょっかいを出したりしていたのだろうと推測された。A児はやがて幼稚園でも様々な音楽活動に取り組む意欲を出し、クラスに溶け込みだしているということが幼稚園から報告された。同級生といっしょに楽器を楽しんだり、順番を待ったりすることもできるようになったということである。

A児が当初は歌うことに積極的でなかったもう一つの原因として、声域が狭いことと和音伴奏から歌の音が取

れないこと、そして前奏と間奏、後奏の違いがわからないという音楽経験不足の問題もあった。声域に関しては、6歳にしてはだいぶ狭いものであったため、声域に十分配慮し、A児が歌いやすい調に移調して実施するよう心掛けたところ、曲の最後まで歌い通すことができた。さらに伴奏を複雑な和音ではなく、主旋律だけの単音としたことで、同年齢の発達段階のスキルには程遠いものの、音が取れるようになった。また、前奏・間奏・後奏の意味を理解させようとして、編曲の工夫により歌に入るタイミングをわかりやすくしたことで、フレーズの頭から歌えるようになった。このことから、ゆっくりとした時間の中で理解しやすいような音楽指導を工夫することの大切さを感じるとともに、被虐待児であるからできないのではなく、音楽経験の不足がこのような結果をもたらしているという視点を持つことの大切さを感じさせられた。通常は、養育者が生活の中で歌って聴かせることで子どもは歌うことを自然に覚えるものであるが、虐待された子どもたちはそうした経験が欠如しているため、歌うことになじめないのである。なお、曲を最後まで歌えるようになって、一本調子で抑揚のない歌い方が見られたので、曲に合わせて手で波を打つことや音楽に合わせて軽く体を揺らすなどを行ったところ、歌い方に改善が見られた。

「カレーライス」を歌いながらパネルを見ていたA児が、「スプーンがないとたべられないよ」と発言したことから遊びが発展し、不織布にクレヨンでスプーンを描き、さらに「カレーライスは辛いからお水がほしい」という意見からコップをつくるなどのこともあった。

他にも子どもの想像力から次々と遊びが展開し、個から集団へと広がっていくのが認められた。このように活動を進めながら次第に相手の気持ちをくみ取るスキルを身に付けていったことがうかがわれる。

「リミック」は、即興音楽とその中に呼びかけ技法を取り入れるやり方で実施した。さらに、子どもたちの状況に応じたテンポや伴奏法などを工夫した。最初、A児は、音楽を聴かず、ただ走り回るだけであり、休符を完全に無視して休まなかったり、逆に休みすぎたりする状況があった。そこで、休符のところで「止まる」と言いながら動きを停止させるようにしたところ、音楽をよく聴こうと心がけるように変化していった。また、停止するだけでなく、音楽に合わせて動きがあり、音楽の変化を聞き分けできるようになった。さらに、長調から短調に転調すると「暗くなった」といい、知っている曲がラテン系のリズムに変化

すると「楽しくなった」などと変化を言葉で表現するようになった。音楽をよく聴くようになったところより、セラピスト(筆者)の指示をよく聞くようになったことも注目すべきことである。それは、即興音楽が可能性を広げ、豊かな音楽の世界を構築できることにより、A児が音楽との一体感を作り上げることができるようになっていったことを示すものと思われる。

## V. 結論

本研究では、虐待による後遺症が特に重いA児を含め、5名の被虐待児を対象として「音楽遊び」のセッションを実施し、その結果、虐待による後遺症を改善する上で音楽遊びに一定に効果があることが見いだされた。しかし、厳密な意味での対照群は設けていないので、セッションを通して見られたA児の社会性の改善・向上がどこまで音楽遊びの効果によるものであるかは確定できない。また、虐待によって深く傷つけられたA児の心が、音楽遊びのセッションによってどう変化したのか、その内部までは計り知ることができない。しかし、20回にわたるセッションを通して現われたA児の変化は、音楽がA児の傷ついた心に癒しの効果をもたらしたことを示すものであることは確かだといってよいだろう。考察で示したように、当初は自己中心的で粗暴に見えたA児の様子が、セッションを重ねるごとに和らぎ、仲間存在を気にかけるまでに変わっていったのは、間違いなく音楽遊びの効果と考えられる。また、最後のところで指摘したように、休符をめぐるA児の劇的な変化は、音のない空間の意味を知ることによって音楽の喜びを一層深く味わえるようになったことを示唆するものである。これらのことから、凍りついたA児の心を溶かし始め、生きる喜びをわずかにでも味わわせるのに、音楽が大きな効果をもったことは間違いないといえてよいだろう。

とはいえ、本研究では、A児の様子を把握しながらセッションのやり方を工夫したことが一定の効果をもたらしたということであり、虐待の態様や子どもの個性、あるいはセッションの工夫のしかたによっては、いつでも同様の効果が得られるとは限らない。

今後は、音楽遊びの何が、虐待されて凍りついた心の琴線に触れたのかを、さらに掘り下げて解明する必要がある。他方、たとえ音楽遊びに効果があるとしても、現状では音楽遊びを実施できる指導者が少ないという問題がある。そこで、音楽遊びのセッションの進め方につ



いても、高度な訓練を受けていない人でも実施しうるようにするにはどうしたらよいかを検討することも、重要な課題であると考え。

## 文 献

- ウィニコット,D.W., 橋本雅雄監訳 (1988)『反社会的傾向・盗みと愛情剥奪』岩崎学術出版社
- エリクソン,E.H., (1972.)『遊びと発達心理学』、赤塚徳郎・森楸監訳、黎明書房、1983年
- エリアナ,ギル., 西澤哲訳(1997)『虐待を受けた子どものプレーセラピー』誠信書房
- 大迫秀樹 (1999)「児童自立支援施設処遇における地域力の活用—小学生寮における子ども会活動参加実践を通じて」『社会福祉研究』75-85-90
- 木村恵理(2009)「日本における児童養護施設の心理療法担当職員の役割—現状と課題に関する文献的研究—」『お茶ノ水女子大学研究紀要Tea Pot』8 -163-172
- 沢宮容子(1998)「幼児用社会性尺度の作成」『日本応用心理学会紀要』24- 9 -17
- 杉山登志郎 (2013a)『子ども虐待という第4の発達障害』学研
- 杉山登志郎(2013b)『子ども虐待への新たなケア』学研
- 高橋三郎ほか (2010)『精神疾患の分類と診断の手引き』医学書院
- 館直彦(2013)『ウィニコットを学ぶ 対話することと想像すること』岩崎学術出版
- 田村立(2007)「虐待を受けた子どもの予後」『小児科臨床』60(4)751-759
- 友田明美(2012)『いやされない傷』診断と治療社
- 谷村宏子(2012)『音楽療法の視点に立った保育支援の試み』関西学院大学出版社
- 坪井裕子・李明慧(2007)「虐待を受けた子どもの自己評価と他者評価による行動と情緒の問題」『教育心理学研究』55-335-346
- 藤岡淳子(2001a)「非行の背景としての児童虐待」『臨床心理学』1 -771-776
- 藤岡淳子(2001b)『非行少年の加害と被害』誠信書房
- 増田高(2013)『社会的養護児童のアセスメント』明石書店
- 森田善治(1988)「養護施設児の遊戯治療」『大阪教育大学障害児教育研究紀要』11-37- 4

## 謝 辞

本研究に当たり、児童養護施設の施設長及び職員の皆様、そして音楽遊びに参加してくれた児童の皆様に感謝申し上げます。

(注)

- 1 研究の倫理的配慮としては、研究の目的など詳細を施設長、職員に十分理解いただき、音楽遊びへの参加と協力に関して口頭にて同意を得、守秘義務を遵守して実施した。尚、ビデオ及び写真撮影の了解を得ている。資料については施設の了解を得ている。
- 2 本研究は、2014年に行われた第14回日本音楽療学会学術大会において口頭発表したものを加筆・修正したものである。